

人間の言語行動

矢田部 達郎

一 動物に言語機能があるか

言語の三大機能として表情 (Ausdruck) 呼びかけ (Appell) 表現 (Darstellung) を説いたのはカアル・ビューラー (Karl Bühler) であつたが、これらの機能中どれか動物には見出されない機能があるだろうか。足を踏まれたイヌがキャンキャンと叫ぶのは表情音であつて、第一の機能が動物にあることはいうまでもない。第二の呼びかけというのはいさ説明を要するが、例えば赤兒が泣聲を出して母を呼ぶ。これは單なる表情音であるばかりでなく、かれの欲求を母に訴える提訴の意味をもつていふと考えることができる。ビューラー夫人 (Charlotte Bühler) はそこに人間の社會性の萌芽を見たのである。この第二の機能は既に夜鳴きする小犬の泣聲にも認められるし、さらには友を呼ぶ虫の音のうちにも認められるものであつて、決して人間言語に特有のものではない。

そこで人間言語にとつて重要な機能は第三の表現機能であると考えられた。表現機能というのは言語が或る事物を表わしていること、即ち事物を指示していること、事物を代表していること、意味をもつていふことであつて、従つて場合によつては記號の機能、代表の機能、意味付けの機能とも呼ばれるものである。しかしこの機能を廣義に解すると、あらゆ

る精神作用の特徴であると考えられることもできる。例えばブレンターノ (F. Brentano) が精神作用の特徴としてあげた対象の内在性、即ち精神作用の志向性の如きは、廣義における表現機能と異なるところがない。事實知覺の如きも何物かを表象するのであつて、知覺も既にその「意味」をもつといえるだろう。

もとより知覺の代表が決して外界の單なる模寫でないことはいろいろの點から明らかにされている。知覺は單なる所與ではない。その最も明瞭な證據はいわゆる恒常現象 (constancy phenomenon) に関する知見によつて與えられた。恒常現象というのは例えば大人なら遠くから眺めても大人としての大きさに見えるということ、その場合網膜像の大きさからいえば、近くにいる子供よりもずっと小さく映つてゐるはずなのである。これを大きさの近似的恒常という。雪は月夜に見ても白く見えること、皿は斜めに見ても丸く見えることなども、それぞれ明るさ、形等の近似的恒常と名づけられた。これは知覺が生理的刺激的模寫でないことを示す事實であるが、それ故ザウレス (R. H. Thouless) という人はかかる現象を眞實在への現象的回歸 (phenomenal regression to real objects) と名づけたのである。それならば知覺は素朴な模寫説が考えたように、やはり物理的世界の模寫に過ぎないのであろうか。もしそう考える人があつたら、それは大きな誤解であるといわなければならない。

かかる考え方に對する重大な警告の一つは、知覺心理の領域においては、かの空間の異方性 (anisotropy) という現象の研究によつて與えられた。既に正方形が縦長に見えるというアリストテレスの錯視にも認められるように、われわれにとつて空間の垂直方向と水平方向とは等價的でない。また例えば眼前一米に呈示される直径十糎の圓板は頭上一米に呈示される同じ大きさの圓板よりも遠く小さく知覺される。さらに眼前と頭上とに發音體を置き、その間を移動する第三の音源を、閉眼にて、その丁度中間に定位させる實驗では、被験者は眼の高さより上約二十四度あたり(四十五度ではなく)を中央と判斷することが見出された。即ち心理的空間は物理的空間とちがつて、その座標軸の價が一樣でないことがわかる。

このように知覺世界は物理的世界を決してそのままに模寫するものということはできない。

それならば知覺が代表する世界は一體何物であろうか。それこそ正に生物學的世界、特に心理學的世界と名づくべきものであるといわなければならない。既に古くから溫度感覺には生理的零點なるものがあつて、異なる皮膚の位置に應じてその部位の體溫と相對的に暖冷を感じない特定溫度が存するという事實が知られていた。或は運動競技のレコードなどのように、生理的極限というものがあつて、その極限に近づけば近づくほど、それに到達するためには極めて大きな努力を必要とするものであることも知られている。これらはすべて有機體の行動がその機能の限界に制約されることを示すものに他ならない。この點は心理的機能についても全く同様であるということが出来る。従つて生物學的世界、或は心理學的世界は有機體の機能と相對的な世界であり、知覺は實にかかる世界の記號であり代表者である。もし知覺について回歸ということがいえるとすれば、それはかかる機能的な世界への回歸、或はむしろ前進でなければならぬ。

このように考えて見ると、知覺の記號性ということの意味がかなりはつきりと浮び上がつて來るように思われる。それは決して物理的世界の代表ではなく、また單なる生理的條件の忠實な記述でもない。それはわれわれの行動を有効に導くための手がかりを提供する役割を演ずるものに過ぎない。だから知覺は必ずしも物理的世界の諸性質に對應しないのである。このことは實はあらゆる記號の本質的特徴であるということが出来る。既に知覺の前段階である感覺的傳導の機構を考えて見るのに、例えば聽覺において、音の高さの傳導は決してそのままの形で中樞に送られるものでないことが明らかにされている。即ち神經傳導は電氣化學的なリレーであるから、毎秒多くとも千回以上のパルスを送ることは不可能であり、従つて千振動以上の音はそれが傳導されるためには何か別の形に變形されることが絶対に必要である。また周知のように單一神經纖維は悉無律に従うから、單獨では強度差を傳達することができない。強度は興奮する纖維數とか、纖維の太さとか、或はその他別の秩序に置き換えられなければならない。それはあたかも電信の符號が言語的秩序を或る他の特

定の秩序によつて置き換えるのと異なるところがない。このように感覚でさえも既に一種の記號系であり、置換作業の結果として生ずるものであることが明らかである。そしてこの點に氣がつかならば、上述の恒常現象だの異方性の現象だのに關して矛盾のように見えた諸事實も、決して不可思議ではないことがわかるだろう。例えば一縷の網膜像が一耗の網膜像と等しく、共に一個の成人という同じ大きさのものを代表するとしても、それは一縷の大きさに書かれた人という字が一耗の大きさに書かれた人という字と等しく、同じ人という概念を代表しうるのと、この點に關する限り、原理的には何らの相異もないといえるからである。そういうことが可能であるということが、それが記號の本質に他ならない。

以上述べたように感覚でさえも、それらは決して外界の素朴な模寫ではなく、一種の信號系であり、記號體系であり、意味を有し、代表機能を有するものとすれば、これら低次の代表機能は言語的記號體系とどのように區別さるべきであろうか。換言すればこれらの代表機能と言語の代表機能とを區別する特徴は何であるかを考えて見なければならぬ。第一には言語の代表機能は知覺などの場合のように、代表關係が直接的、自然的でないことをあげることができよう。つまり言語の代表關係は間接的、人工的である。しかし言語でも擬聲語や擬態語はかなりの程度に直接的、自然的といえる。例えばワンワンというのはイヌに直接的、自然的に結びついたイヌの特徴であつて、それがイヌを代表する。その點だけならミカンの色がミカンを代表する知覺の場合と同じである。ちがうのはイヌそのものの鳴聲ではなく、それとは別の人聲がイヌを代表することだろう。つまり鳴聲がイヌを代表するのを、さらに人聲が代表する。すなわちそれが記號の記號であるところにある。從來言語は單なる記號ではなく、記號の記號、すなわち象徴であるなどといわれた理由はここにあるのだろう。

今日でもこれで何か問題が解決されたように考えている人が案外多いのではないかと思われるが、實際は問題はそう簡單ではないのである。困ることは、單なる間接性ならば、極めて簡単な條件反應の如きも同じように間接的なのである。

即ち實際の食物の視覺的信號ではなく、それと同時に與えられた音叉の音などが唾液の分泌を結果するのであるから、音叉の音は記號の記號に他ならない。しかもこの場合音叉の音は知覺的記號とはちがつて、自然的でも生來的でもなく、全く人工的、後天的であること言語的記號と異なるところがない。のみならず條件づけは二次的にも三次的にも可能なのであつて、或る實驗では、最初音叉と電撃とを組合せて音叉だけでイヌの足を曲げさせる動作を引きおこした後、今度は音叉と光、次に光とベル、最後にベルと扇風機とを組合せて、扇風機によつて直ちに足を曲げる動作を起させるというような、幾重にも間接的な記號を作ることに成功している。もとよりこういう行動が眞の言語行動からはなはだ遠いものであることはいうまでもない。

こういう條件づけが可能であることがわかつてくると、言語的記號の特徴を單なる間接性に歸するわけにはいかないことがわかる。そこで言語的記號の第二の特徴として、記號の能動的使用という點が強調された。條件記號は後天的、間接的記號ではあつても、言語的記號のように自分でそれを手段として能動的に使用することはできない。言語でいえば理解はできても、まだ使用はできない段階に相當する。ところがこの特徴も決して充分なものとはいひにくい。ただ音聲の手段的、能動的使用ということだけなら、昔からいわれるように、虫の鳴聲のうちにも、またカケスの餌鳥を眞似する叫び聲のうちにも認められるところである。しかもこれらは單なる身體的動作ではなく、立派な音聲的手段になつてゐる。ただこの場合の手段は生來的、本能的なものであつて、後天的、習得的な言語的手段と比較することはできない。もちろん鳥などの鳴聲にも後天的因子が全くないわけではない。このことは鳥の鳴聲には方言があるといわれ、ウグイスやカナリアの美聲には先生が必要だといわれることからわかる。しかしそれがその基本能力において生來的であることには變りはないだろう。

しかるに、こんなあやふやなものでなく、明瞭に後天的に習得した手段を能動的に使用しうるものが、近頃の動物實驗

によつてだんだん明らかにされるようになってきた。それは操作的條件反應、或は道具的條件反應といわれる動物の行動である。この種の行動を最初に研究したのはスキナー(B. F. Skinner)という人で、ネズミやハトの箱の中に、レヴァを押すと餌がひとつぶずつ出てくる装置を作つて、それを操作するように動物を訓練した。レヴァは餌を志向する、或は餌にレヴァするのであるから、餌の記號とも考えられる。そこで記號的手段を操作することによつて餌を獲得するのであるから、正しく前に述べた記號的手段の能動的使用という特徴に合う行動といえる。これが今日有名なスキナーの言語說である。この場合レヴァが音聲的記號でないということは、それほど重要な問題ではないとも考えられる。なぜなら、人間における身振語は立派な言語ではあるが、音聲を使用するわけではないからである。ところが、そこには何かもう一つ大きな差異があるようにも思われる。おそらく言語的記號の場合にはレヴァの場合に比して、被記號者との關係がもつと間接的であり、記號が獨立の存在として被記號者から離れても存続しうるといふ點で大きなちがひがあるのであるまいか。

ところがこのスキナーの實驗と類似の狀況で、ウォルフ(J. B. Wolfe)やカウルズ(J. T. Cowles)という人達がチンパンジーについて行つた實驗では、この手段的記號が間接性を獲得し、獨立的に働きうることが明らかにされた。自動販賣機にボーカア・チップ(ボーカアの勘定に使う札)を入れるとブドウが出て來ることを訓練したのち、今度はレヴァを押すとブドウが出る器械に訓練し、また同じ器械でレヴァを押すとボーカア・チップが出て來ることも教える。そうすると動物はそのチップを先の自動販賣機に入れてブドウをうるようになる。こうなるとチップは立派に貨幣の役目をはたすわけである。そればかりではない。チップの色によつてブドウが一つしか出ないものと、たくさん出るものとを區別すると、多い方を喜び、またすぐ食物に替えられるものと、實驗終了後でなければ替えられないものを作ると、もちろん前者を重視する。

この種の實驗は心理學ではトークン・レワードの實驗と呼んでいるが、トークンはシンボルと同様、語源的には割符で

ある。そして割符の機能が言語にとつてもその重要特徴を構成することは否定できないと思われる。このような間接的であり、習得的である手段的記號の能動的使用は、正しく言語の機能であると考える學者が、アメリカには相當いるわけがあるが、そこにはまだまだ何か足りないものがあるようにも感じられる。それはやはり音聲であるかないかということだけなのであろうか。

音聲の分化ということなら、近頃京大の伊谷氏は日本ザルにおいて數十種の音聲記號を區別しうると主張している。しかしこれらも充分な言語の必要特徴を備えているかどうか疑わしい。主なものは危険接近の合圖、食物發見の合圖、群の出發の合圖といったようなもので、つまり合圖であるから、表情の機能や呼びかけの機能はもっているが、表現の機能としてはまだまだ不十分のような感じを禁じえない。合圖ならば從來ニワトリにも警告、威かく、呼び音等十に近いケースが區別されている。河村教授や園原教授などはスズメの群にもそれ以上の鳴音を區別することができるといつておられる。しかしそれらはすべて表情であり、合圖であり、呼びかけであつて、眞に表現言語ではあるまいということは、例のケロッグ夫妻 (W. N. and L. A. Kellogg) やヘイズ夫妻 (K. J. and C. Hayes) のチンパンジー飼育實驗の結果が、ついに言語教育に失敗したという事實が如實に物語つているように思われる。

ケロッグの場合はグワという七カ月半の雌のチンパンジーで、それを家庭に入れ、自分達の十カ月になる男の子と一緒に九カ月間わが子を育てるように育てたのである。スプーンで食べることも、鉛筆やクレヨンで搔畫を畫くことも、また「戸をおしめ」「口からお出し」「笛を吹いてごらん」等五十種位の言葉を理解することもできたが、ついに自分で發語することはできなかった。ヘイズの場合はヴィキイという雌のチンパンジーで、生後一カ月から赤坊と同じように、おしめまでさせて育てられた。特徴は人間の赤坊のように大聲では泣かないこと、喃語期が極めて不完全であること、ただしあらゆる種類の發音が不可能なのではないように見えること。生後數週間で「ウツウツ」とか「アグー」とかいうように

なり、三カ月頃には物をねだつて吠えたり、人に挨拶して唸つたりしたが、四カ月頃から片言らしいものを全然いわなくなつてしまつた。そこで聲を出さなければミルクをやらないような訓練を始めた。十カ月頃になつて、初めてうめき聲を出すときミルクがもらえることを悟つたように見える。十四カ月の頃口を抑えてもらつて「ママー」がいえるようになる。それから漸次「ママ」はヘイズ夫人から食物を貰うとき、「パパ」はヘイズ氏から食物を貰うとき、「カップ」は水を貰うときというように、三つの語を使いわかるまでに上達した。理解の方は、やはり五十種たらずの状況に適當に反應したが、發語の方は満三歳で家庭内飼育をやめたときにも、これ以上あまり進歩を示していない。ただ注目すべきはハイボールの廣告の繪を見て「カップ」といつたことがあるという所見ぐらいのものであろう。

さてこのようにいろいろの場合をみてきたが、それなら最初にもどつて、いつたい動物は言語機能をもっているのだろうかという問に答えなければならぬ。しかし實はこの問は悪い問である。なぜなら言語機能ということの定義次第でイエスともノーとも答えられるような問だからである。ところが定義は定義する人の勝手であつて、どれでなければならぬということがない。前に述べたように動物に表出機能のあることはいうまでもない。また呼びかけの機能もかなり分化發達している場合がある。特に高崎山のサル群のように大きな集團を作っている場合には、一種の社會的交互作用によつて合圖の分化は相當に著しい。これは蜜蜂のコミュニケーションについても同様にいえることである。さらに動物において表現の機能も、少くともその萌芽は認めて差支えないだろう。そうだとすると、一應は動物に言語機能があるといえないこともない。ただここに問題となるのは、やはり動物において見られる表現機能の意味である。この機能をただ對象を指向するということに止めれば、それは動物にもあることはいうまでもない。條件刺激は無條件刺激の來ることを指向している。これは信號ということができよう。動物の辨別學習において、例えば圓の描いてある窓を選べば餌が與えられるということを経験する場合には、圓は餌を指向するといえる。これはオグデンやリチャーズ (C. K. Ogden and I. A.

Richards) のいう道標の状況と同じであろう。

だから言語の表現機能を單純な記號の機能と同一視するなら、動物にもこの機能があることはいうまでもない。さらにもつと複雑と考えられる割符の機能さえ、サルにはできることを前にみてきた。この場合には記號が獨立性をもち、間接性をもち、能動的に道具として使用される。こうなると從來考えられて來た言語的徵標のほとんどすべてが備わつてゐるようにも思われるのである。しかしそれにも拘らず前にも述べたように、そこにまだ何かが足りないように感じられるのは、いつたい何なのであろうか。

幼兒が最初の語「ウマウマ」を用いるとき、それはウマウマの美しさでも、高價なことでもなく、ただその食物としての價値が指向される。またそのウマウマで遊ぶやうというのでも、それを検査しようというのでもなく、ただそれを喰べたといふのである。こういう指向關係を一次元的、一樣相的レファレンスと名づけよう。上に述べた動物の場合もすべてこの一次元的、一樣相的レファレンスしかもつていない。ところが幼兒が二歳頃になつて、いわゆる名に對する飢の現象を示す時期になると、そこに初めてほんとうの意味での命名作用が可能になる。命名というのは一次元的、一樣相的關係に満足するものでなく、多次元的、多樣相的な統一體、簡單に言えば或る實體的なものへの記號づけなのである。同じ記號でもそこに大きな開きがあるといわなければならない。この意味で命名作用は一種の實體化の作用であり、物化の作用であつて、それゆゑ幼兒や未開人においては名と物との混同が顯著であり、また名の呪力が信じられる。否、成人においてもノミナリズムの滑稽はいたるところに認められる。近頃の大學過剩説などがその好例である。名の物化的作用の功罪は別として、言語的記號關係が前言語的記號關係と異なるところは、實にこの多次元的、多樣相的指向關係、即ち言語の物化的機能にあるといわなければならない。この結論はいかにも古めかしいが、しかしそういう結論が導かれたのは、昔とちがつて、現代の比較心理學が多くの新しい實驗的所見を提供した結果であることを忘れることができない。

二 人間言語の特徴、その多相性

記號と反應との一次元性、一樣相性ということについては、一應説明しておかなければならないことがある。條件反應の構成時において、例えば千振動の音で條件づけをすると、八百振動の音でも、或は千二百振動の音でも、唾液反應の如きを引き起こすことができる。これを刺激の汎化というが、従つて記號の方は相當廣い有效許容範圍があるわけである。

日常生活でも或る一つの目的を達成するためにはいろいろの手段が有効であるから、通例、人は相當ちがう手段のセットを用意している。これを心理學の方では習性群と名づけるのである。一方目的の方も通例は必ずしも全く同じである必要はない。腹がへつたときは食物でありさえすればよいのだから、ここでも當價對象の許容範圍はかなり廣いわけである。

そこで簡單な記號と反應との對應もこの意味では一義的に決定されているわけではない。その一次元性、一樣相性というのは特定の欲求には特定の解消能力をもつた對象があるということ、上の例でいえば飢餓と食物との間の關係のようなことを意味するのである。そしてこういう特定の關係において成立した記號と反應との關係は別の關係、例えばリンゴを觀賞するというような關係ではリンゴを代表することはできないということである。つまりリンゴの食物としての價值だけが代表されている。そればかりではない。リンゴの食物としての價值がいわば目的格としてだけ代表されているので、それを主格としても、屬格としても使うことはできない。こういうことを上に一次元性、一樣相性と名づけたのである。

ところが命名作用によつて指向される對象は、名詞ならば、勿論主格としても、屬格としても、目的格としても使用されうるばかりでなく、極めて多くの動詞、つまり心的機能に關係づけられうるのである。このことはしかし通例考えられるような、概念の一般性とはちがうのであつて、むしろ固有概念の特性であるといわなければならぬ。幼兒が命名作用を學ぶとき、そこには最初から二つの種類が認められる。一つは「ウマウマ」であり、他は「ママ」（母親）である。前者

は一般名詞の最初であり、後者は固有名詞の最初であるわけであるが、「ウマウマ」の方は常に食物という單一機能しかもたないのに對して、「ウマウマ」の方は異なる機會にいろいろな欲求を満たしてくれる。前者では物は變わつても機能は同一であるのに、後者では物が同じであつて機能が色々に變化する。この固有名詞こそが多次元的、多樣相的言語記號の標本であり、その類推によつて、一般名詞もまた文法上で多次元的、多樣相的に使用されるようになる。そこに不當な實體化乃至物化作用が生ずるわけである。

もちろん知覺的記號にもこの實體化作用が全然備わつていないとは思われない。しかし人間の知覺についてそれが自明のことと思われるほど、それが自明なことであるか否かには大きな疑問があるといわなければならぬ。人間の場合にはこの知覺の實體化作用が逆に言語の實體化作用によつて強く支えられているのではないかとも思われるからである。このことは動物の反應が物に對して起るのではなく、むしろ單純な知覺的性質、例えば特定な色、特定の振動等に向つて解發されることを考えると、相當眞實らしく思われるのである。蜘蛛のうちには巢にかかつた餌には直ちに躍りかかるが、その同じ餌が目前に歩いて來ても全く無關心であるものがある。もとより動物には實體化が全然不可能だというものではない。鳥はその配偶を認識するであらうし、犬はその主人を忘れないであらう。しかしこれらの記號には信號と反應との間の一次元的對應が認められるばかりなのである。

言語のこの多樣相性は言語學者にはもとより自明のことと考えられていたわけであるが、それを記號論の問題の中心に持ちだしてきたのはカッシラ (E. Cassirer) の象徴形式の哲學であつた。カッシラの言語學說では、言語は擬態的、類推的、象徴的の三段階を通して發達するといわれ、大體これと平行して神話的、言語的、認識的機能が對應すると考えられた。擬態的段階においてはワンワンが犬を表わし、ニヨロニヨロが蛇を表わすように、記號と對象との關係は極めて具體的、直接的、直觀的であつて、從つて記號はそのまま對象と同一視されやすく、そこに呪術的、神話的思考様式が展

開される。類推的段階では音聲の形式的性質系列と思想的性質系列との對應が取りあげられ、a、o、uが遠いところを、e、iが近いところを表わし、mが自分を、t、dが相手を表わすというようなもの、或は語を重ねることが分配的複数を、アクセントの相異が文法的範疇の相異を表わすような場合等、種々の表現手段が考えられるようになる。それと呼應して思想と思想との對應的關係も注目され、例えば花言葉や寶石の言葉のように、花や寶石の一群からえられる印象と人間的性質の一群からえられる印象との間に類推的對應が求められる。比喩の特徴はこういういわば體系的バックの上に形成されるところにあるといえるだろう。そしてこのような漠然たる對應に信賴して運ばれる思想の型が日常言語の世界であるといえる。これに反して科學的認識においては、記號は全く對象の直觀的性質から自由になり、抽象的な運算による演繹と、その現實への適用である實證とによつて、眞知に到達することができる。

カッシラアの象徵形式の思想はもちろんカントの思惟形式としての範疇論の流れを汲むものである。アリストテレスの範疇が實在の形式であつたのに對して、カントのそれが主體の活動形式として考えられたことは有名であるが、實は兩者は相關的なものであり、カッシラアの象徵形式はこの點については充分の反省の上に提唱されたものであつた。しかしその傳統が示すように、かれの形式が甚だ認識偏重であつたということは否定できない。言語が客觀的見地からも、主觀的見地からも、もつと複雑な機構から成立していることはいうまでもない。既にアリストテレスの論理學と雄辯術との區別が示すように、思想を整理する機能と他人を説得する機能とは別であり、また文學的效果を與える言語の機能はさらにまた別であると考えなければならない。

特に言語の社會的機能は近代に至つて著しく注目されるようになった。ピエル・ジャネ (Pierre Janet) によれば、言語は最初から人に語る行爲と人から語られる行爲の總合として成立するといわれる。即ちそれは命令する行爲と命令される行爲との總合である。これが後に他人に命令すると同じように自分にも命令するようになり、そこに内語が発生し、思想

が発生する。この時以來、人は言語と動作との二つの仕方で行動するようになるのだといわれた。

ジヨオジ・ミード(George Mead)の言語發生説もこれに似ている。かれは言語を身振りの一種と考える。しかし普通的身振りは動作者自身によつては充分認識されないのに對して、言語は自分の耳から戻つて來て、動作者自身がそれに反應することができる。今或る人に客のために椅子をもつてこいと命令したとして、その人がぐずぐずしていれば、われわれは自分で立つて椅子をもつてくるだろう。命令には常に自分も反應しようとしているのである。この他人に要求する反應を自分の内部にもひきおこすこと、即ち身振りの内化が思考に他ならぬ。またわれわれは言語によつて二人の人間の間の交通を可能にするばかりでなく、さらに集團と共に思考することが可能になる。野球のチームの成員を考えてみるのに、チームの成員の反應は常に自分によつても遂行されている。逆にチームの成員はいつも自分の反應に參與しているといえる。こういう有機的な集團的行爲によつて初めてわれわれは自我の統一を自覺するようになり、またそういう個體的でない「一般化された他人」の立場に立つことによつてのみ、われわれは抽象的に思考することができ、幼児が初め集團に入るのは遊戲的集團であるが、そこには何ら規則らしいものは存在せず、従つてかれらはまだ一貫した人格をもたない。それが規則のあるゲーム的集團に入るようになって、その集團の考え方を取りいれ、そこに初めて自我の形成が起る。集團に屬し、集團の言語を用いることによつてのみ、人は眞にその人の人格をもつことができると説かれた。

このような考え方からすれば、言語の機能が單なる認識に止まるものでないということとは自明のことと思われよう。この點に着目し、特にアリストテレスの修辭學で取り扱われた方面を復活したのが、近代の一般記號學である。一般記號學のことは餘り有名であるからここでは説かない。しかしそれと同じ精神で、言語の多相的性質を強調したチャアルズ・モリス(Charles Morris)については一言觸れておかなければならない。かれは從來の様相的區別の他に用途的次元を考え、それらを組合わせて次のような分類を提唱した。

Mode \ Use	Informative 報 告	Valuative 評 價	Incitive 指 導	Systemic 組 織
Designative 表 現	Scientific 科 學 的	Fictive 小 説 的	Legal 法 律 的	Cosmological 宇 宙 論 的
Appraisive 價 値	Mythical 神 話 的	Poetic 詩 的	Moral 道 德 的	Critical 批 評 的
Prescriptive 規 則	Technological 技 術 的	Political 政 治 的	Religious 宗 教 的	Propagandistic 宣 傳 的
Formative 形 式	Logico-mathematical 論 理 數 學 的	Rhetorical 修 辭 的	Grammatical 文 法 的	Metaphysical 形 而 上 學 的

Charles Morris, Signs, Language, and Behavior, 1946, p. 125.

このモリスの分類はそれが雑然としている點で如何にもあぶなげな印象を禁じえない。またかれが各カテゴリーに對して表現の眞偽を問題にするところも、眞偽概念の慣例からすれば奇異の感を禁ずることができないだろう。しかし第一の點はまだ摸索的な試みであることを考慮して、それが改良された場合のことを考えれば、必ずしも馬鹿にできないような氣もする。第二の點は眞偽の規準を實用主義的に考えれば、結局各カテゴリーについて有効な使用の規則を求めることが問題となるのだから、これも今後の研究によつて漸次發見されていく可能性があるのであるであろう。しかしこの可能性は各領域における科學的研究の成果にまたなければならぬし、分類の改良はこれらの成果を基礎とする因子分析的實驗にまたなければならぬ。言語哲學者のうちにはかかる科學的アプローチ以外に哲學的なアプローチの道が別にあるような幻想に捉われている人がいるが、みんなが早くそういう幻想を捨てて、地道な研究に協力しなければならぬ。もとより言語の機能は認識の機能だけではない。いわんや科學的認識の手段だけでないことはいふまでもない。ただし言語の機能がどういふものかという科學的認識に達する道は、言語の科學的認識の機能をおいて他にはないということを忘れることはできない。

言語は最初對象の一性質と主體の一機能との一次元的レファレンス關係として成立した。それが命名作用の發現と共に多次元的となり、多相的となつて、世界を實體的なビーイングによつて住まわれる呪力の世界に作り上げたといふことはできないだろうか。その後呪力の世界は分析學派のいわゆる現實原理によつて解體した

が、しかし言語の世界はどこまでも一種の實存の世界であり、實在的なビーイングによつて住まわれる世界である。言語哲學はこの世界と取組んで、そこに言語の多相性を發見した。それはとりもおさず、人間の種々なる營みの世界に他ならない。われわれはこの世界に生き、この世界に死ぬ。われわれの關心事はこの世界を一步も外に出ることができない。しかしながらこの世界の事物を支配するためには、かの原始言語が樹立した原本的關係を、複雑な現實の中から回復させて把握することを必要とする。これが科學的認識であつて、そこでは再び出来るだけ少數の、出来るだけ單純な關係を示す因子の總合體系として、實在の世界の再構成が企圖される。しかして再構成される世界は、哲學的な實存の世界とちがひ、言語機能の諸カテゴリーに従つて、必然的に多次元的な宇宙とならざるをえないのである。